

鏡の無い部屋——新しいメディアの体験について

山口 誠（獨協大学）



新しいメディアは新しい体験を生み出す。たとえばデジタルカメラの登場は、新しい写真の利用方法を可能にただけでなく、カメラを通じて体験する「世界を観る方法（世界観）」を変

化させた、といえる。するとメディアの歴史を問うことは、われわれの「世界観」の変容を探索する一手となり得る。

こうした問題関心から、デジタルカメラの新ジャンルであり、現在のカメラ市場で人気を博しているミラーレスカメラに着目し、この新しいメディアの登場によってどのような「世界観」の変容が経験されているのかを考えた。

従来の一眼レフカメラでは「鏡（光学ファインダー機構）」によって、レンズからカメラに入ってくる光を撮影者へ届けていた。しかしミラーレスカメラは文字通り「鏡」を除き、レンズから入ってくる光をカメラの背面モニターに映し出すことで、まるで動画をモニタリングしながら静止画を撮影するかのような写真体験を採用した。

その結果、ミラーレスカメラは一眼レフカメラよりも重量とサイズが半分以下になる小型軽量化を達成し、価格も一眼レフより安いことから、二〇一〇年以降のカメラ市場でシェアを拡大し、とくに若い女性のカメラユーザーに支持される新ジャンルとなった。

ミラーレスカメラの登場は、それまで男性中心だった日本の写真文化に現在進行形でさまざまな変化をもたらした。なかでもミラーレスカメラを手に旅行に出かけ、旅先で「セルフイ（自分撮り、自撮り）」を楽しむ体験が広まっていることに注目した。

本報告ではいくつかの具体的事例を示し、ミラーレスカメラで「セルフイ」を撮る者は、自らの姿に熱中し没頭するナルシスティックなまなざしではなく、監視カメラの画像をモニタリングするような覚醒と監視のまなざしを自らの身体へ投げかけ、セルフイメージを構築する、という新しいメディアの体験が観察できることを提起した。こうした再帰的な自己監視のまなざしは、「セルフイ」あるいは写真文化に留まらず、現代社会のさまざまな領域に偏在している。

獨協大学外国語学部交流文化学科教授。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。観（社会情報学）。関西大学社会学部教授を経て現職。専門はメディア研究、歴史社会学、観光研究。主著に「英語講座の誕生」（講談社、二〇〇九年）、「グラムと日本人」（岩波書店、二〇〇七年）、「ソッポンの海外旅行」（筑摩書房、二〇一〇年）など。